

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成30年9月20日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 理学研究科・生物科学専攻

職 名 准教授

氏 名 渡辺 勝敏

助 成 の 種 類	平成 30 年度 ・ 国際会議開催助成		
国 際 会 議 名	第9回国際トゲウオ会議		
開 催 期 間	平成 30 年 7 月 3 日 ～ 平成 30 年 7 月 7 日		
開 催 場 所	京都大学吉田キャンパス		
参 加 者	総 数 96 名	内 訳 学内者 4 名、学外者92名(うち海外から70名)、 公開講演には加えて約30名	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	事業に要した経費総額	8,383,801 円	
	うち当財団からの助成額	830,000 円	
	その他の資金の出所	<small>(機関や資金の名称) 情報システム研究機構・国際ネットワーク拠点形成助成金;アメリカ遺伝学会(学生渡航援助);国際トゲウオ会議繰越し金;京都大学運営費交付金</small>	
	経 費 の 内 訳 と 助 成 金 の 使 途 に つ い て		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	旅費・交通費	5,896,124	503,039
	会場・会議費	369,140	245,976
	印刷製本費	58,890	58,890
	通信運搬費	20,463	11,987
	謝金	25,000	0
消耗品	138,328	10,108	
その他	50,170	0	
レセプション・エクスクーション費	1,825,686	0	
当財団の助成について	<small>(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回国際会議を開くにあたり、貴財団からの助成は大変役に立ち、心より感謝しております。 一点だけ、ご意見を申し上げます。今回6月以降の募集に対して、採択決定が6月後半となり、支出計画を立てる上で、また特に大学委任経理を行う上で、かなり時間的に難しく、学内外の事務作業において煩雑で重複的な手順を取らざるを得ませんでした。以前のように2期の募集とし、いずれの時期に開催する会議においても、有効に貴財団の貴重なご援助が受けられるようにしていただければ幸いです。</small>		

第9回国際トゲウオ会議 成果の概要

京都大学大学院理学研究科

渡辺勝敏

2018年7月4日から7日にかけて、京都大学の吉田キャンパスにて、96名（海外から70名、国内から26名）が参加して、第9回国際トゲウオ会議（9th Internal Conference on Stickleback Behavior and Evolution）を開催した。

回遊性の淡水魚「イトヨ」を代表とするトゲウオ類は、古くはノーベル賞受賞者のティンバーゲンによる動物行動学の研究対象として知られ、さらに現在では、進化ゲノム学のモデル生物として世界各国で広く研究されており、生物多様性研究のモデル生物の一つとなっている。トゲウオを扱う分野は、動物行動学、進化生物学、生態学、内分泌かく乱物質研究、生理学、寄生虫学、遺伝学、ゲノム生物学など多岐にわたっていることから、トゲウオを材料に研究している国内外の研究者が一同に会して意見交換し、分野横断的な共同研究を進展させるような場が必要とされている。国際トゲウオ会議はそのような場として、これまで、数年に1回の頻度で、オランダ、カナダ、スウェーデン、イギリス、アメリカなど欧米で開催されてきた。本会議は、様々な分野の研究者に門戸を常に開くため、会長や理事といった役職、会員制度や会則を設けていない。この度、申請者や国立遺伝学研究所の北野潤教授ら日本のトゲウオ研究者有志15名は、我が国における進化研究のレベルの高さを海外にアピールし、さらに国際的な交流のもとで、研究者から若手までの研究をレベルアップさせることを目的とし、2018年の第9回会議をアジアで初めて主催することとした。

7月4日から7日まで連日の口頭発表を吉田キャンパス北部総合教育研究棟内の益川ホールにて実施した。また4日と5日には理学研究科セミナーハウスにてポスター発表を実施した。

連日にわたって、朝一番に招待講演を配し、それらを事前登録なしで聴講できる公開講座とした。招待講演は、スタンフォード大学のDavid Kingsley教授（7月4日）、ブリティッシュコロンビア大学のDolph Schluter教授（5日）、マギル大学のAndrew Hendry教授（6日）、ベルン大学のOle Seehausen教授（7日）という進化生物学・発生学・生態学における国際的に著名な研究者にお願いした。招待講演をオープンとしたこともあり、連日の悪天候にも関わらず、立ち見が出るほどの活気であった。様々な切り口からの進化生物学の最新的话题を、京都大学の学部生、大学院生を含め、多くの日本人が直接聴く機会を得たことは、本会議の大きな成果の一つであった。

招待公演のあとは、Genomics, Behaviour, Molecular Mechanism, Ecology and Evolution, Physiology, Epigenetics and plasticity, Host and microbeなどの多岐にわたる分野の講演

が、学生、ポスドク、PI など様々なキャリアステージの研究者から行われた。5 日と 7 日の一般講演の後には、トゲウオ研究で顕著な業績を上げてきたストックホルム大学の Bertil Borg 教授とストーニーブルーク大学の Michael Bell 教授という大御所の研究者 2 名に、これまでの研究生生活についての振り返りと若者へのメッセージを含んだ講演を行っていた。7 日には、免疫学出身の Natalie Steinel 博士による特別講演もあった。

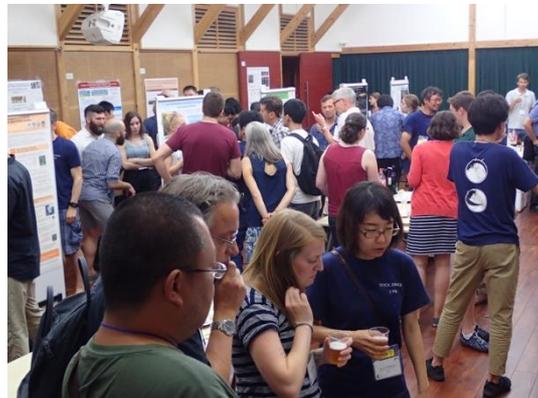
学生による口頭発表およびポスター発表について、それぞれ優秀賞審査員（海外研究者 4 名および 3 名）を事前に定め、学生優秀ポスター賞を 3 名、学生優秀口頭発表賞を 3 名に授与した。ポスター賞受賞者は全員が日本人であり、日本の若手の研究のレベルの高さを世界に示すこともできた。

会議終了後の 8 日には、福井県大野市のトゲウオ生息地を訪問し、参加者たちはイトヨの生息地に感銘を受けるとともに、日本の小さな街並み・風景にも大きく感銘を受けた模様であった。また、会議中の意見交流から、トゲウオ研究に関する知識・プロトコルを共有できるようなトゲウオ情報ウェブサイトとしての StickleWiki の立ち上げが決定した。さらに、会議で発表・議論された成果については、Evolutionary Ecology Research 誌に、4 カ国 5 名の研究者（マギル大学 Andrew Hendry 博士、ベルン大学 Katie Peichel 博士、イーストキャロライナ大学 Jeff McKinnon 博士、ラーバル大学の Nadia Aubin-Horth 博士、国立遺伝学研究所の北野潤博士）が編集することで、特集号という目に見える形の成果として発表することが決まった。

以上のように、本会議を通して、日本の研究のレベルの高さを世界に示すことができたとともに、日本の研究者の国際交流が確実に加速化され、また、参加者間で多数の国際共同研究が新たに生まれた。



益川ホールにて、招待講演（オープン）と一般発表が行われた（7/4～7）。



理学研究科セミナーハウスにて、ポスター発表および交流が活発に行われた（7/4、5）。